

信頼度NO.1のがん実用誌!

がんサポート

前立腺がん総力特集

5

2012 Vol.110
定価 1,200円

丸わかり完全図解／検査・診断／低侵襲治療
ロボット手術／ホルモン併用放射線療法
抵抗性前立腺がんの薬物療法／骨転移治療

痛みはがまんしない

森喜朗元首相「私の生き方」

青島幸男の最期の生き方・最期の死に方

先端医療の現場

リンパ浮腫防止手術

ホームページ <http://www.evidence-inc.jp>
がんサポート情報センター <http://www.gsic.jp/>
がん暮らしサポート <http://www.gankurashi.jp/>



8回手術を受け、2度声を失いながら、がんと闘い抜く現役医師

がんと の闘いに 挫けそう なときは 私を 思い出し てほしい

東京・八王子にある永生病院。

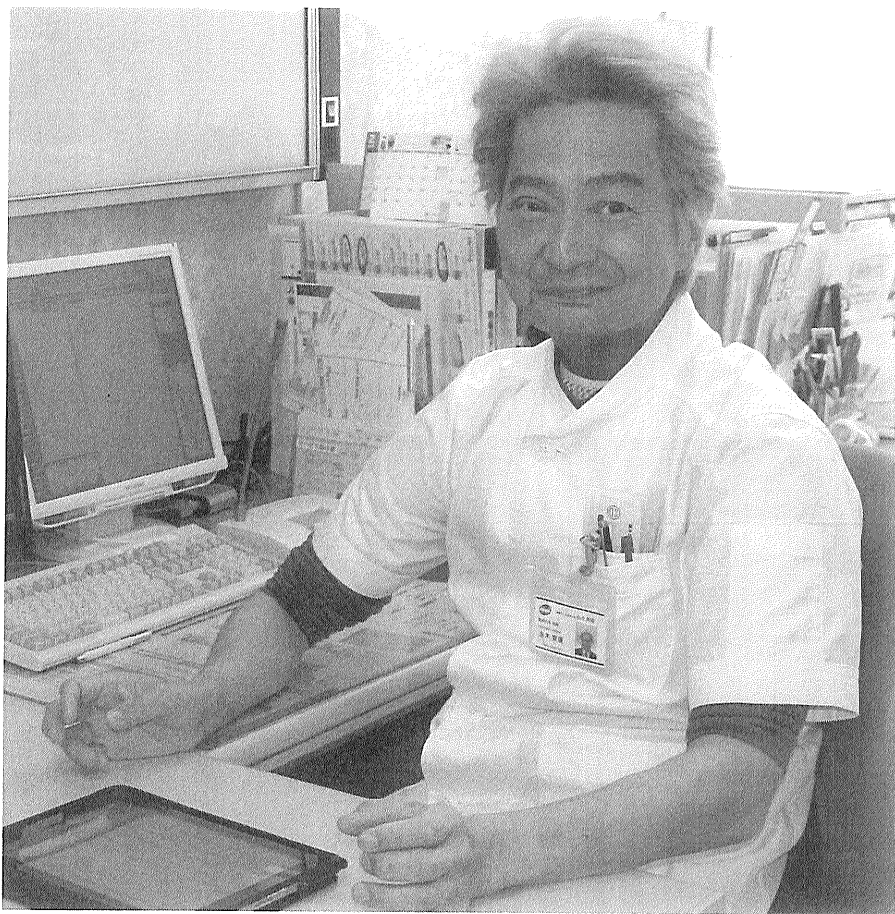
ここに、「金髪先生」として親しまれる整形外科医がいる。

赤木家康さん、54歳。

咽頭がん、舌がん、食道がんの再発など、

8度もがんと闘いながら、診療やバンド活動を続ける、異色のドクターだ。

取材・文●吉田耀子



あかぎ いえやす 1957年岡山県生まれ。85年東海大学医学部卒業後、日本大学医学部整形外科学教室入局。国立立川病院、公立阿伎留病院、春日部市立病院などを経て、93～95年日本大学救命救急センター勤務。96年板橋区医師会病院整形外科部長、2000年永生病院整形外科部長を務め、03年10月同副院長に就任、現在に至る。著書に『癌!癌!ロックンロール～金髪ドクター、6度の癌宣告&6度の復活』（産学社）

何度再発しても 病氣と闘い続ける理由

赤木家康さんは47歳で咽頭がんを発症し、4年半後に舌がんを発症。その後わずか1年7カ月の間に、舌がんの再発や食道がん、咽頭がんの再発など7つのがんを経験した。再発を繰り返し声を失っても、そのたびに不屈の闘志で立ち上がる赤木さん。その姿は多くの患者に希望と勇気を与え続けている。

「がん細胞は自分の体の細胞から生まれてきたもので、誰を恨むわけにもいかない。病氣になったら、『病氣と闘う』『あきらめる』『つきあう』という3つの選択肢がありません。くよくよ悔んだり落ち込んだりしても、メリットはないのです。ですから、思い残すことがないよう、患者さんのために仕事をし、人生を楽しみたい。やりたいうことをやるのも、そのためです」

年間200件の手術をこなす
カリスマ・ドクター

江戸時代から続く岡山の商家
に生まれ、外科医として活躍す

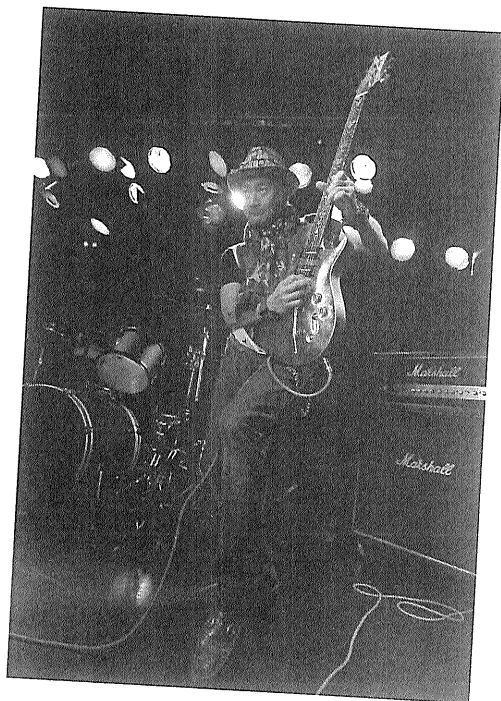
る叔母の姿に憧れて育った。

1浪の末、東海大学医学部に進学。ロックバンドの活動に熱中しすぎて留年の憂き目にあったが、ライブ活動を封印して、医師国家試験に1発合格。卒業後は、日本大学医学部整形外科学教室に入局。医師の仕事の厳しさを実感した赤木さんは、必死に勉強し、整形外科医の知識と技能を修得。43歳のとき、永生病院の常勤整形外科医として、新病棟の立ち上げに尽力することとなった。

寝る間も惜しんで仕事をするうちに、赤木さんはいつしか、年間2000件以上の手術をこなす「カリスマ・ドクター」として知られるようになっていった。03年には副院長に昇進したが、一方では、仕事上のストレスや軋轢に悩まされるようになった。しだいに喫煙量や飲酒量が増え、赤木さんは脱力感や疲労感に苛まれるようになっていく。

47歳で病期4の咽頭がんを発症

ついに体が悲鳴を上げたのは、47歳の2005年10月のこと。空咳が出るようになり、声のか



ライブコンサートでギターを演奏する赤木さん。再発するまで、数カ月に一度、ライブでロックを演奏してきた

すれや右頸部の腫れも気になり始めた。仕事に忙殺され、なかなか病院に行けずにいたが、たまたま予定していた手術が中止になり、友人の耳鼻科開業医を受診。その紹介で、12月14日東海大学医学部付属八王子病院で、内視鏡検査を受けた。このとき、担当医が「ああ」という嘆息を漏らしたのを聞いて、赤木さんはがんであることを直感。病理検査の結果は、下咽頭がんだった。

「告知を聞いたときは、全く平常心でした。ただ、できるだけのことをして治さなければと思いました」と、赤木さん。「病気になるってしまった以上、あれこれ悔やんでもしかたがない。

ギターのコレクション。米国の製作者に特注するギターは、ボディが患者さんが彫ってくれた鎌倉彫のものやや金箔張りのものなど、実にさまざま



今やるべきことをやるしかない」と覚悟を決めた。

紹介状を持参して、癌研有明病院頭頸科部長の川端一嘉さんのもとを訪れたのは、その翌日だ。川端医師はこう言った。

「手術で切除する方法と、放射線と抗がん剤で腫瘍を小さくしてから手術する方法があります。どちらを選びますか」

もし手術すれば、喉頭も一緒に摘出するので、声を出すことはできなくなる。しかし、リンパ節転移のある進行がんを抱えて、年を越す気にはなれなかった。赤木さんは迷わず手術を選択し、12月22日に手術を受けた。

「自分の命はかけがえのない、ただ1つのもの。その命を守るた

めなら、どのような機能障害を負うことになってもかまわない。命があれば、また医者として患者さんの役に立てるかもしれないと思ったのです」

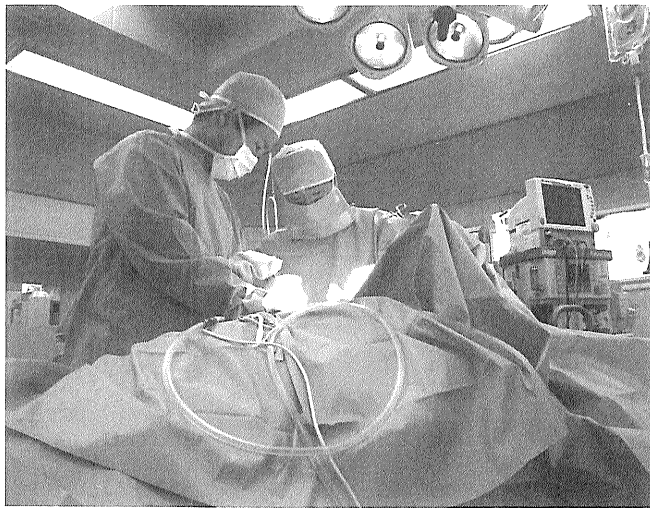
手術は16時間にわたる大がかりなものだった。咽頭と喉頭頸部食道を全摘し、食道の部分に空腸を移植。摘出したリンパ節のうち、7個から転移が見つかった。幸い、遠隔転移はなかったが、術後は今までに経験したことのない痛みに襲われた。モニター音とアラーム音だけが鳴り響くICUにいますと、時間の感覚もなくなる。耐えがたい激痛が続き、幻覚に悩まされるようになった。

「これがICU症候群か」

医師としての冷静な意識が、患者である自分を見つめる。膨大な数の手術をこなしながら、患者の苦しみを自分はほとんどわかっていなかった。ICUの中で必死に苦痛に耐えながら、赤木さんは苦しい思いをかみしめていた。

シャント手術により
仕事への早期復帰を果たす

06年1月下旬から3月初旬に



かけて、30回の放射線治療が行われた。それが終了してから、術後の補助化学療法が始まるまでは、1カ月ある。赤木さんは不安に駆られて、じっとしていることができなかった。

かつて経験したことのない抗がん剤治療。そして、「5年生存率30%以下」という非情な現実。不安を打ち消すように、温泉や海外有名アーティストのコンサートに足を運んだ。幸い、手元には、生命保険の生前給付金がある。赤木さんは憑かれた



上の写真) 執刀中の必需品、マイクとスピーカー。術衣のマスクの下では、ヘッドホンスタイルのマイクをつけ、首からさげたスピーカーで拡声する
左上の写真) 最初のがんによる咽頭・喉頭・頸部食道全摘手術後に職場復帰し、整形外科手術の執刀をする赤木さん(右側)。シャント手術を受けて声を取り戻した

ように、高額のコレクター向けギターやAV機器を買いまくった。

4月中旬、シスプラチン^{*}、5-FU^{*}、タキソテール^{*}の3剤併用療法による抗がん剤治療がスタート。最初の1週間を過ぎると、なんともいえない全身の

倦怠感^{けんたいかん}とひどい口内炎に悩まされるようになった。

当初、化学療法は4〜6回の予定だったが、副作用があまりにつらく、赤木さんは主治医に中止を打診した。経過がよかったこともあって、化学療法は2回で終了。

シリーズ がんと生きる

こうして治療は一段落したが、問題は、声帯がない状態で社会復帰ができるかどうかである。赤木さんは4月から、喉頭摘出者の発声訓練団体に参加して発声トレーニングを始めていた。これは、空気を飲み込んで食道のため、ゲップの要領で発声するという方法だ。発声のコツはすぐに覚えたものの、仕事をするには、とても満足のいくレベルとはいえない。

そこで、8月中旬、食道発声をしやすくするための「シャント手術」を受けた。シャント手術とは、気管支と食道の間に穴を開けてプロヴォックスという機器を挿入し、気管の空気を食道に送って声を出す方法である。この手術により、喉頭摘出術後1年を待たずに仕事に復帰。11月下旬、外来診療を再開した赤木さんにひと目会おうと、旧知の患者が大勢詰めかけた。感涙にむせぶ患者の姿を見て、赤木さんはしみじみと幸せをかみしめた。

「医師としての自分を、こんなにも必要としてくれる患者さんたちがいる」

その感動は、赤木さんのその

後も続く闘病生活を支える、パワーの源泉となっていく。

がんを経験して初めて患者さんの立場に立てた

がんからの生還は、「声を失う」という代償と引き換えのものだった。それが、人一倍活動的な赤木さんにとって、あまりにも大きな犠牲だったことは想像にかたくない。だが、赤木さんは後遺症を「命を守るために」はしかたがないもの」として、淡々と受容した。「病氣の人や障害をもった人に対して、自分は一体何ができるのか」——それが、赤木さんの生涯をかけた大きなテーマとなっていく。

「病氣になる前の私は、いやな奴でした。患者さんの立場に立っているようでいて、実は自分の立場で考えていたのです。でも、『声が出ない』という障害を負ったことで、人は誰しも何らかの障害を負って生き、いつかは死んでいくことを知った。それに気づいたことで、患者さんのことを心底思い、患者さんの立場に立てるようになりました」

整形外科的な体の痛みや不調

*シスプラチン=商品名プリプラチン、ランダ
* 5-FU =一般名フルオロウラシル
* タキソテール=一般名ドセタキセル

の背後には、ときとして、心の痛みやうつが隠れていることがある。にもかかわらず、以前の赤木さんは、それを探ろうとしなかった。

「がんになって、『自分が生き残れたら何をしたいか』と考えたとき、『患者の役に立ちたい』と心から思いました。自分が1番やりたいのは、患者さんに寄り添うことだと確信したのです」

「金髪先生」として評判に ロックギターをかき鳴らす

仕事に復帰後、赤木さんの行う整形外科手術のスピードは以前にもまして向上した。頸部のボタンを押さないと声が出せなくなった影響で、集中力も研ぎ澄まされ、手術が短時間で終わるようになったのだ。

問題は、シャント手術により声は出せるようになったものの、大きな声が出せないことだった。手術のときはマスクを2重にするので、声が小さいと助手の医師や看護師に指示が伝わりにくくなる。そこで、赤木さんは一計を案じ、秋葉原でヘッドセット型のマイクと8cm角の小さな

アンプ付きスピーカーを購入。試行錯誤の末、小さな声を増幅して聞こえやすくすることに成功した。

外来患者数は次第に増え、整形外科医の陣容も、赴任当時の1人から3人へと拡大。赤木さんの評判を聞いて、海外から治療に駆けつける人もいるほどだった。

しかし、どんなに忙しくても、赤木さんは、以前のような仕事漬けの生活に戻ることはなかった。仕事の合間を見つけてはハワイやヒマラヤに出かけ、ときには、仲のよい患者たちと一緒に小旅行を楽しむ。抗がん剤治療の直前から始まった「ギター購入症候群」も重篤化の一途をたどり、自宅の地下室は一大コレクショナルームと化した。ギターリストとしてバンドユニットを結成し、思い切った髪も金髪に染めた。こうして、「永生病



永生病院で行う唱歌や童謡のコンサートで他の職員とともに演奏。敬老の日のイベントなどで、定期的にコンサートを開く。2011年は震災復興のチャリティコンサートを2回行い、合計80万円もの義援金が集まった

院の「金髪先生」の評判は、日増しに高まっていった。術後5年を目前にしてがんが次々に再発

口腔内に舌がんが見つかったのは、下咽頭がん治療のめどとなる術後5年まで、あと半年を残すだけとなった、2010年7月のことである。

その3カ月ほど前から舌に潰瘍ができ、定期検診の際に細胞診を行ったところ、「扁平上皮がん」との診断が下った。

「ついに来たか、という感じで、とくに衝撃はありませんでした」

そのように、赤木さんは淡々と語る。診断から1週間後の7月31日に、手術で舌がんを摘出。ところが12月下旬、今度は、切除した舌の奥が痛むようになった。鏡で舌を観察したところ、舌の右側に腫瘤を発見。翌年1月に病理検査を受けたところ、舌がんの再発が判明した。

「できるだけ、再々発の危険性が少ない治療法をお願いします」

2010年1月20日に再発舌がんの手術を実施。舌を4分の1と、下顎骨を含めて奥歯3本を切除した。さらに、手術で欠損した部分には、胸から血管付きの皮膚が移植された。

手術から2カ月後の3月、職場に復帰。だが、がんはその後追撃の手を緩めなかった。

4月中旬、今度は中・下咽頭がんが再発。さらに、内視鏡検査を行ったところ、食道がんが食道上部と下部の2カ所に見つかった。5月中旬、手術により咽頭ごと上部の食道がんを摘出。今後はもう、声を出すことはほぼ無理だろうと告知された。このときの心境を、赤木さんは6月15日の日記にこう書いている。

（神は私に何を教え、何をさせようとしているのでしょうか？（中略）二度も声を失い、声がなく復職できるでしょうか？）
それなら、私はすべてのガンを乗り越えて生き残り、iPadで筆談し、MacBookの発声で職場に戻ってみせましょう。私が病に打ち勝ち、病を乗り越え、復活する人間の強さを皆さんにお見せしましょう」

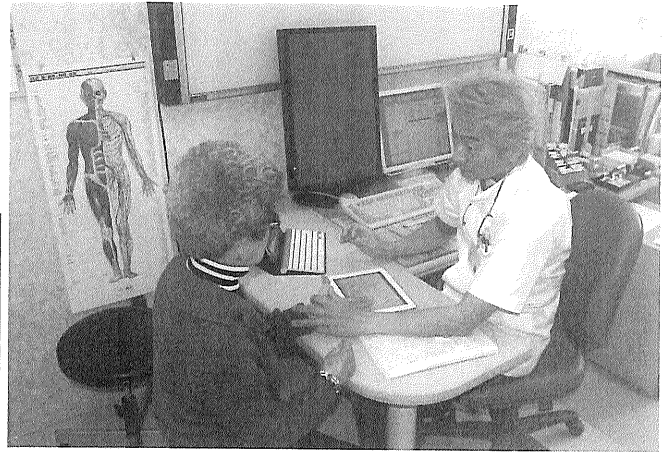
iPadやiPhoneで 新しい診療方法を模索

9月26日に下部の食道がんの手術を行ったが、その3カ月後、今度は下咽頭がんが再発。今年1月、頸部食道を全摘し、空腸を移植して再建。3月には口蓋垂にがんが再発し、手術。わずか1年7カ月の間に、赤木さんは、実に7回ものがん手術を繰り返したことになる。

いつ終わるともされない、苛酷な闘病生活。にもかかわらず、赤木さんは「がんになつてよかった」と力強く言い切る。

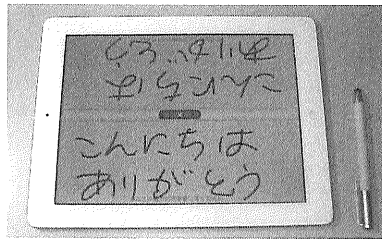
「利点の1つは、『自分の死を意識できた』ということです。死は誰にでも訪れる。死んでしまつたら、もう自分の人生を生きたことはできない。1度しかない私の人生が、いつも私に『何がしたい？ 何ができる？』と問うのです。自分の人生を全うするということは、本当に大変なことだとわかりました」

「自分の生涯を賭けて、患者さんの役に立ちたい」という思いは、赤木さんの不屈の闘志を呼び覚ました。赤木さんは診療を続けるために最新の音声技術や



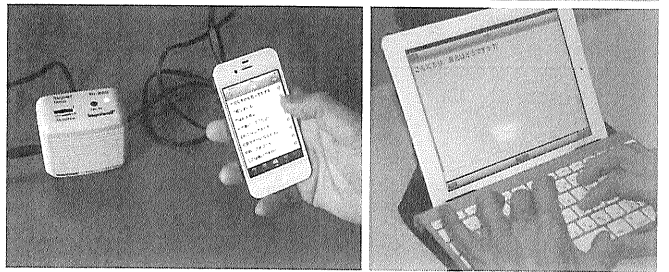
IT技術を駆使する。

その1つに、タブレット端末「iPad」の筆談ソフトを活用する方法がある。これは、タッチペンで画面の



下部に文字を書くと、上下反転した文字が反対側に現れるという優れたもの。これなら、画面の向きをいちいち変えなくても、対面する患者が医師の書く文字

IT技術を駆使した外来診療の様子。iPad端末に文字を入力し、読み上げソフトで音声化する。いわゆる電子音声とは異なり、イントネーションや抑揚も整った日本語になる。筆談ソフトを用いた画面には、対面しながらお互いに書き込める。指電話ソフトのアプリを用いたiPhoneの入力画面。音量が必要なときは、スピーカーを接続することも。これらの機器は外出時いつも携帯する



をそのまま読める。筆談がとてスムーズだ。

もう1つの愛用ツールは、スマートフォン「iPhone」対応のソフト「指伝話」。これは、登録した言葉のリストの中から、伝えたい言葉を指でスクロールして選択し、音声で伝えるアプリである。その場で言葉を打ち込んで会話することもできる。赤木

さん自身もこのソフトの開発に協力し、今年2月に発売されたばかりだという。「痛みはどうですか」「痛いのは右ですか、左ですか」「力を抜いて楽にしてください」「痛かったら言ってください」「痛は、お大事に」等々、診察でよく使う文例を登録。患者とのコミュニケーションに絶大な威力を発揮している。

どんな困難に直面しても
けっしてあきらめない

8つのがんという試練と闘っ

てきた赤木さん。「この1年半は、自分の命を守ることで精一杯だった」と振り返る。

「これで、私とがんとの闘いが終わるのか、まだまだ続くのかはわかりません。でも、私は8つのがん、笑顔で闘ってきました。2度も声を失いましたが、こんなことは何でもありません。失った機能よりもっと大きなものを得、もっと多くのことを知ったからです」

次々と畳みかけるように訪れる試練。それに平然と立ち向かう赤木さんの姿は、あきらめず、与えられた命を全うすることの大切さを私たちに教えてくれる。「8つのがん」と闘うことで、私のなかに、どんな困難にも立ち向かうことのできる力が備わりました。声は出なくとも文章は書けるし、音楽を聴いたり、演奏することもできる。前を向いて1歩1歩、生きていくことは十分に可能です。もちろん、誰もががんと前向きに闘えるわけではないかもしれない。でも、闘いに挫けそうになったときは、私の話を思い出してほしい。それを力に変えていただければ、とても嬉しいのです」